

未来ノート

-202Xの君へ-

野球

やま さき やす あき
山崎康晃

縦じまへの憧れ

強豪ゆえの重み

癖を生かす努力

新たななる選手像

甲子園で先輩活躍「僕も」

フィリピン出身の母はバスケトボールチームのチアリーダー、日本人の父は冬は陸上部、夏は水泳部。1992年10月2日、山崎康晃はスポーツが身近な一家に生まれた。3860号の大きな赤ちゃんだった。二つ年上の姉とは、取っ組み合いになるようなけん

かが、日常茶飯事だった。「明るくて、めちゃくちゃ活発だったと、お母さんはどこに行っても言いますね」。家でゲームをするよりは、友達と鬼ごっこをして、傷を作って帰ってくるような子どもだった。野球との出会いは幼少期、父に連れて行ってもら

った草野球。ルールは全く分からなかったが、「楽しそう」と感じた記憶はある。そして地元東京都荒川区には、親同士が仲のいい憧れの先輩がいた。プロ野球日本ハムなどで活躍した森本稀哲さん(38)だ。

園名物のかち割り氷を頭に押しあてていた。小学2年から中学卒業まで、地元の少年野球チーム「西日暮里グライティーズ」に所属。「ひたすら楽しい野球でした。上下関係もそんなにないし。中学3年のときは、投手として全国大会に行っただんです。地元では鈴木誠也(広島)や山本泰寛(巨人)が有名で、僕はその次ぐらい」

5歳のとき、東京・帝京高校でキャプテンをしていた森本さんの姿を見に、家族と夏の甲子園を訪れた。第80回全国高校野球選手権記念大会の3回戦。鳥根・浜田高校のエース和田毅(現ソフトバンク)から、森本さんがバックスクリーンに2点本塁打を放ったシーン鮮明に覚えている。帝京は惜敗したが「かっこいいなあ。僕も縦じまのユニホームを着て、甲子園に出たい」。あまりに暑くて、家に帰るときは、甲子

園名物のかち割り氷を頭に押しあてていた。小学2年から中学卒業まで、地元の少年野球チーム「西日暮里グライティーズ」に所属。「ひたすら楽しい野球でした。上下関係もそんなにないし。中学3年のときは、投手として全国大会に行っただんです。地元では鈴木誠也(広島)や山本泰寛(巨人)が有名で、僕はその次ぐらい」

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。



①憧れだった森本稀哲さん(中央)と山崎康晃(左)②小学生時代の山崎康晃(いずれも本人提供)



森本さんがバックスクリーンに2点本塁打を放ったシーンを鮮明に覚えている。帝京は惜敗したが「かっこいいなあ。僕も縦じまのユニホームを着て、甲子園に出たい」。あまりに暑くて、家に帰るときは、甲子

園名物のかち割り氷を頭に押しあてていた。小学2年から中学卒業まで、地元の少年野球チーム「西日暮里グライティーズ」に所属。「ひたすら楽しい野球でした。上下関係もそんなにないし。中学3年のときは、投手として全国大会に行っただんです。地元では鈴木誠也(広島)や山本泰寛(巨人)が有名で、僕はその次ぐらい」